



[氏名] 白石 卓也
[出身都道府県] 群馬県
[卒業期] 33期（平成22年度卒）



「はじめてのへき地診療所勤務」

1. 序文

寒いな。休診日である2014年4月1日（火）に私は診療所へ赴任した。診療所の医者は私だけであり、明日から自分ひとりで患者さんの診療に当たらなければならない。ひとりで働く姿が想像つかず、不安にかられた。診療所の二階に併設された医師住宅は広く、寒さとあいまって私はいっそう心細くなった。見ず知らずの土地であり、外に出るのも億劫であったが、玄関の扉を開けた。きれいな川が診療所の前を流れていた。神流川か・・・、魚でもいるかなあと思い、川を眺めていると、後ろから声をかけられた。「水道局の人かい？」突然の出来事であり、どのように返答したら良いのか戸惑いながら、「えーと、新しく来た診療所のものです。」とぶっきらぼうに答えた。その老人は怪訝そうに眉をしかめていたが、しばらくすると「あー、新しい先生かい！」と表情を和らげた。その老人の表情をみたときに、私の心は少し軽くなった気がした。



2. 将来に対する漠然とした不安

見ず知らずの新しい土地で働くことは誰もが不安に思うはずである。若くて経験も少ない時期に医者としてへき地へ赴任しなければならないならば、自分が経験するだろう未来を想像することができず、いっそう不安に感じると思う。私もそうであった。しかし、へき地に住む住民も実は同じ感情をもっているのではないだろうか。どのような医者が来るのか、きちんと地域医療に従事してくれるのか、自分たちの健康を責任持って守ってくれるのか住民は不安に思っている。その不安を医者が変わるたびに感じている。だから、どこの地域でも同じ医者に長くいてもらいたいといった意見があがるのだと思う。医者と住民がお互い感じているのであろう我が身にふりかかる将来に対する漠然とした不安は、顔と顔を合わせたときに初めて解消されるのだと思う。

3. 診療所の仕事

「かかりつけ医」として生活習慣病などの慢性疾患をもつ患者さんが一日平均 30～40 人、多い時は 80 人ほど診療所を受診した。さらに、心筋梗塞や交通外傷など救急疾患の患者さんも診療所を受診し、問診や身体所見から病態を把握し、限られた設備から診断をしぼり、本人や家族の意向を汲み取りながら治療方針を決定しなければならなかった。近隣の病院へ救急車で約 40～90 分かかるため、一刻も早く救急搬送が必要な患者さんの場合は群馬、長野、埼玉からドクターヘリを要請した



りもした。超高齢社会の上野村は、在宅治療を望む患者さんも多かった。病院に行けば助かるかもしれないが、寝たきりになってしまったり、病院で最後を迎えたりとその患者さんや家族の望まない治療結果となってしまう場合がある。そのため、患者さんを病院搬送するべきか、家族が希望する在宅治療でよいのか、治療方針決定に苦渋することが多かった。医者の方断として何が正しいのか思い悩む中、患者さんやその家族と真剣に向かい合うことで多くの場合は問題を乗り越えることができ、患者さんや家族に感謝してもらえ結果につながったと思う。

(診療所の概要・生活・取り組みは平成 27 年「自治医科大学医学部卒業生の現状」をご覧ください)

4. はじめてのへき地勤務に対するアドバイス

序文には続きがある。老人に出会った後に案内された場所は集会場であった。診療所のある地域では、毎年 4 月 5 日にお祭りが開催される。その練習場所であった。老若男女問わず膝を突き合わせてお酒酌み交わし、ツマミをつついていた。そこで私は地域住民に紹介され、誰が誰だかわからないままに顔を合わせ、お酒を酌み交わし不安を忘れるくらい酔っ払った。緊張していたため、酔いが回るのも早かったのだと思う。その翌日の初勤務日には、そのできごとが噂になっていた。診察時に患者さんから昨日の出来事の話をしてくれて、私の不安や緊張は和らいでいった。



はじめてのへき地勤務を乗り越える方法は人それぞれである。自分と同郷の自治医科大学の先輩方の集まり（県人会など）に参加して話を聞いたり、前へき地勤務者である先輩からアドバイスをうけたりするのがよい準備方法だと思う。しかし、私はそれだけでは不十分であり不安は解消できないと思う。なぜなら、医者側の意見は聞けたとしても、これから相手する住民の考え方がわからないままだからである。住民も新しい医者がかかることは不安であるし、その不安をいち早く解消したいと願っている。はじめてへき地勤務に従事する後輩に対する私のアドバイスは、いち早く診療所の外で住民と顔を合わせて、お互いの考え共有することである。その会話の中で、その地域が必要とする医者像やその地域に不足している医療に気づき、自分の目標が明確になるだけでなく、自分がへき地勤務することを住民がどれだけ感謝してくれているのか実感できると思う。恐れずに診療所の外に出てみよう。



月に1度開催される Dr（ドクター）会

健康や病気の相談、地域の情報を得るよい機会であり、現在の医師にも引き継がれている。